

# ジュニアリポーター通信

編集・発行：信濃毎日新聞社

発展途上国や東日本大震災の被災地で取材を続けるフォトジャーナリスト安田菜津紀さんの写真教室が昨年12月、松本市あがたの森文化会館で開かれました。撮影に挑ん

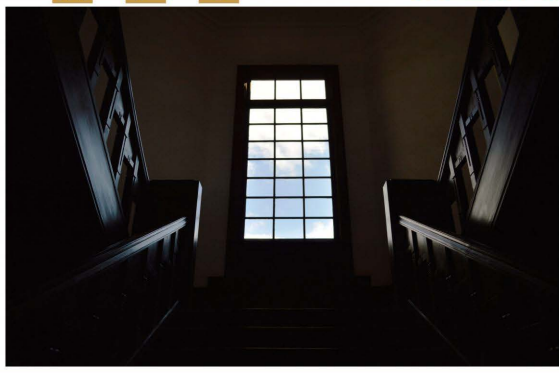
だジュニアリポーター17人は、たくさんの写真の中からベストショットを選び、みんなの前で発表しました。安田さんの講評、中高生の記事と併せて紹介します。

## 今を切り取る 写真の可能性

フォトジャーナリスト安田菜津紀さん 松本で教室

### ベストショット

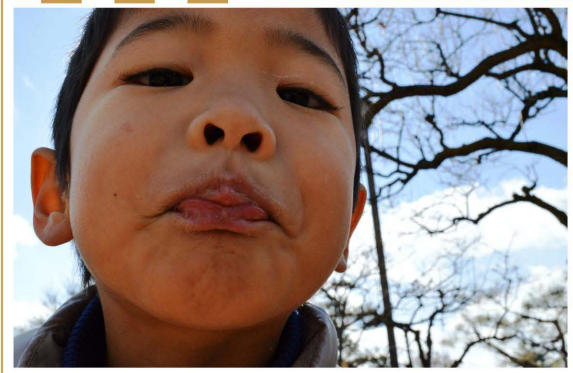
溝口開人くん



かつては学校だったあがたの森文化会館。階段の暗さと窓の明るさが印象的で、どこか別世界に誘われているよう。

### ベストショット

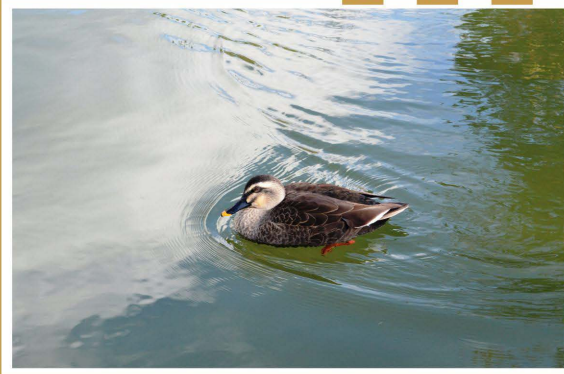
櫛原立冬さん



アップの表情がなんともユニーク。なにかなどいかに納められないことでもあるのでしょうか。画面をはみ出す構図は迫力がありません。

小平羽流くん

### ベストショット



池を泳ぐカモ。その波紋が印象的な一枚。カモが日向に出る瞬間を待ち、シャッターを切りました。構図も申し分なく素晴らしい。

### お気に入りの1枚

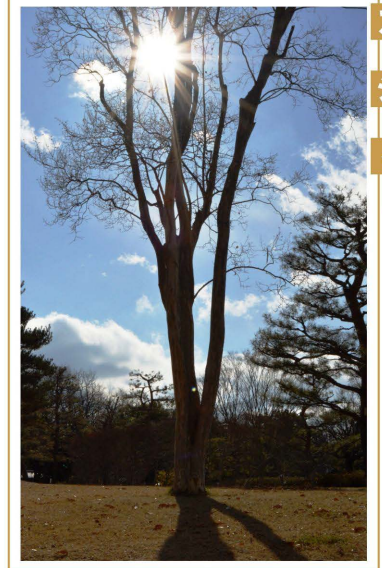
安田さんに写真の基本を教わり、あがたの森公園で写真を撮りました。池のカモや建物など、面白そうな物はたくさんあるのに、なかなかいい写真が撮れません。そんなときに出会ったある男の子に、写真を撮らせてもらうことにしました。しかし、あっちに行ったりこっちに行ったりと動きが素早く、簡単に撮らせてくれません。あきらめかけていたとき、とても面白い顔をカメラに向けてくれました。この一枚は私のお気に入りです。

写真を撮って思ったことは「一枚で伝えたいことを全て伝えるのはとても難しい」ということです。難しかったけれど、楽しかったので、家にあるカメラで面白い写真をたくさん撮ってみたいです。

(櫛原立冬・木曾町福島中1年)

上条真奈さん

### ベストショット



木の枝の間からのぞく太陽。まぶしい日差しを上手にとらえ、すてきな雲囲気を醸し出しています。

### 安田菜津紀

やすだ なつき

1987年神奈川県生まれ。16歳の時、認定NPO法人「国境なき子どもたち」のプログラムに参加してカンボジアに滞在し、貧困問題に関心を持つ。上智大学に在学中、フォトジャーナリストとして活動を始める。世界各国で取材を重ね、アフリカのウガンダで親をエイズで失った孤児を取材した作品で2012年、名取洋之助写真賞を受けた。また、岩手県陸前高田市を拠点に東日本大震災の被災地を継続的に取材。信濃毎日新聞「ステップ!青春のページ」(金曜掲載)で連載中の「中学生被災地へ」では記事と写真を担当している。

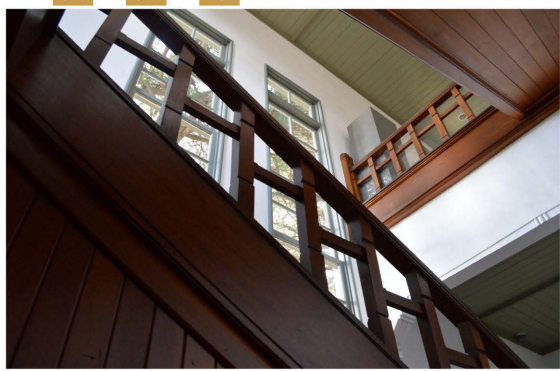


今回の写真教室で中高生に貸し出したデジタル一眼レフカメラは、株式会社二コンからご協力をいただきました。



ベストショット

立岩夏子さん



ちよつと幾何学的な構図。見る人の視線は、手前の階段を下つて渦を巻くように動く。面白い形を発見した観察力の勝利ですね。

写真とは心をつかむきっかけ

まず、写真とは何かについて。安田さんは「心をつかむきっかけ」とおっしゃりました。写真は無関心から興味へとつながる入口だと言うのです。何かに感動し、その感動でシャッターが切られる。写真には気持ちが高かび上がるのだと。そして、私も撮影に挑戦しました。私は、建物の電灯が好きです。撮影時間が終わる間際、どうにか電灯を撮りたくて階段の下から上の方を見あげると、木の階段と窓、そして、そこから見える空がきれいに見え、感動しました。その瞬間をカメラに収めました。

(立岩夏子・国立長野高専3年)

いま自分にできること

安田さんはカンボジアで、「トラフィックドチルドレン」と呼ばれる子どもたちに出会った。値段を付けられ、人身売買された子どもたちだ。しかし、子どもたちと話す、つらい目に遭った自分のことよりも、会えなくなった家族のことを心配していた。

値段を付けられ、売られてもなお、家族のことを想う彼らと話した安田さんは、自分から誰かに優しさをあげたいと強く心に決めた。

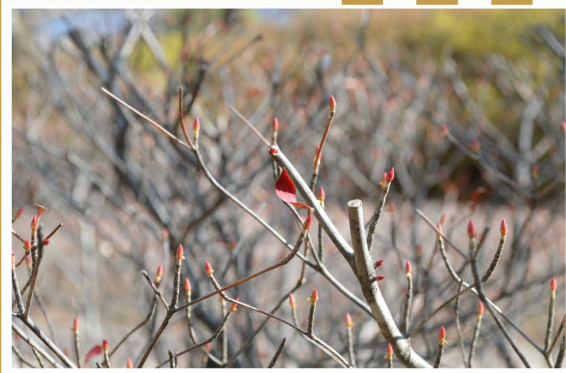
今、中学生の僕たちには何ができるのだろう。東日本大震災のことや、いま世界で起こっているさまざまなことを風化させず、興味を持つこと。そして、自分にできる、自分にしかできない役割を探し、そこに突っ走ること。そして、人に優しさをあげることだと思った。

(坂口侑・上田市第一中1年)

坂口侑くん

ベストショット

背景がぼけていて、主役の花芽や紅葉した葉の邪魔をしていない。葉が落ちた枝がなんだかさみしげで、冬の情景を感じさせます。



ベストショット

小林希さん



男の子の表情がかわいくていいですね。シャッターチャンスを待って、いい表情の瞬間をこらえました。アップにした構図も生きています。

世界の人を笑顔にするために

安田さんが撮った写真のポストカードをおみやげにいただいた。カンボジアの子どもたちが写っていて、表情は満面の笑顔。生き生きとしていて、声をかけたら返事が返ってきそうなくらいだった。笑顔は世界のどこにいても伝わる共通語だと私は思った。世界中の人々が笑顔になるためには、どうしたらいいのだろう。

フォトジャーナリストは、世界で何が起きているのかを写真で伝える仕事だ。そして、写真はその場所に行かないと撮影できない。つまりフォトジャーナリストとは、その場所にある風景、そこに住む人々に会いにいって仕事なのだを教えてもらった。とても素敵な仕事だな、と思った。

(小林希・国立長野高専1年)



安田菜津紀さんがカンボジアで撮影した写真



ベストショット



前島玲美さん

逆光の日差しを上手に使った一枚。太陽の形も美しくとらえられています。遠くの池と手前に座る人がシルエットになっ

三分割の構図で主役のパンジーが引き立っています。背景もつすらとボケさせていて、主役の邪魔をしません。

小山新くん



ベストショット

未来へのメッセージ

安田さんは、中学生のときに父と兄を亡くした。そして、東日本大震災では義理の母を亡くした。震災のあとでは、何を撮ったらよいのか分からなくなったという。そんな安田さんを助けたのは岩手県陸前高田市の仮設住宅に住む人の声だった。

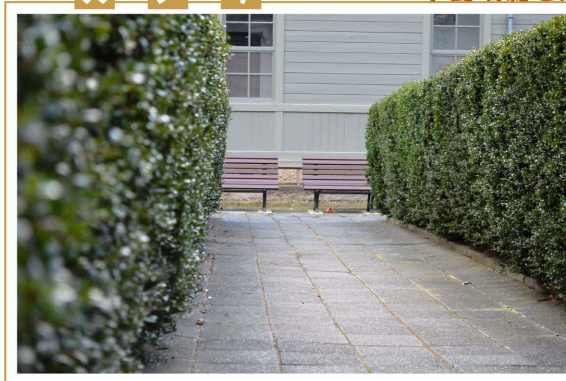
「今思うとね、あのときに写真を撮ってほしかったんだよね。次の世代にヒントとして残してほしかったね」

だんだんと薄れていく震災の記憶。私達もどれだけ震災の記憶を忘れてしまったらどうか。

「この一枚が未来へのメッセージやヒントになるかもしれない」。そんな思いを込めて今日も安田さんはシャッターを押し続ける。

(中島瑞穂・長野高校2年)

ベストショット



中島瑞穂さん

低いアングルから撮影し、迫力のある画面にしました。奥のベンチは何か意味ありげ。手前左の植え込みが少しボケているのもいい味わいです。

小山奈乃実さん

ベストショット



男の子の誇らしげな表情がいい。撮影の際、しっかりコミュニケーションを取れたのもよかった。撮る側と撮られる側の信頼関係もうかがえます。



安田菜津紀さんが岩手県陸前高田市で撮った親子の写真

笑顔引き出すコミュニケーション

安田さんに教わって撮影に挑戦した。公園の遊具で遊ぶ男の子と話しながら、撮影していると、彼が満面の笑みを私に向けてくれた。コレだ!と思った瞬間にシャッターを切った。

安田さんに「男の子の笑顔がステキだね。積極的にコミュニケーションを取っていたね」と評価してもらった。写真のでも満足だったが、褒めていただいたことがまたうれしかった。

今までも、素敵な景色を見ると写真に撮りたいなと思うことが多かったが、今回の取材でさらに写真を撮っていききたいと感じた。

(小山奈乃実・上田市第二中2年)





ベストショット

西崎啓太郎くん



スポーツの写真は難しいけれど、うまく撮りました。蹴ったサッカーボールも近からず遠からずの位置に収まっていて絶妙です。

ベストショット

川上直美さん



遊具で遊ぶ男の子。「さあいくぞー」という表情がいいですね。視線の先を大きく開けて、雲と青空を入れたことで、初冬のすがすがしい雰囲気が出ました。

栗山幸奈さん

ベストショット



男の子の表情がすてきです。視線の先の空間を大きく空け、木の枝や青空をしっかりと入れたのがよかったです。

木内大真くん

ベストショット



逆光を行かした画面づくり。手前の緑と暗い校舎、青空と太陽のコントラストが印象に残ります。

ベストショット

飯島みことさん



友達をモデルにした写真。テーブルの上の花と優しい笑顔、光る髪の毛がとてもいい雰囲気です。

ベストショット

栗林和弘くん



シャッターを押すときに、被写体の動きに合わせて自分も動く。流し撮りに挑戦した意欲的な作品。一斉に飛び立つハトの躍動感が出ました。

流し撮りに挑戦

教室では、まず基本的な構図や撮影技術を教えてもらい、1時間ほどの撮影に挑戦。毎日あまり気にせず通るような場所にカメラを向け、シャッターを切るのは新鮮でした。

私は今回、講義で教わっていない「流し撮り」に挑戦しました。被写体の動きに合わせて自分も瞬間的に動くことで、スピード感を出す方法です。しかし、結果はピンボケであえなく撃沈…。

ですが、講師の安田さんからお褒めの言葉を頂けて光栄でした。教室では、自分で撮った写真からベストショットを選び、みんなの前で発表しました。私は何も考えずにシャッターを切っていたので、知らぬ間に165枚を撮っており選び出すのに一苦労でした。

1人1人カメラを向ける位置や構図が違い、勉強になりました。  
(栗林和弘・松本工業高校3年)



**信濃**毎日新聞地域活動部は2月22日、県内の中学・高校生を対象にした川柳教室を佐久市野沢会館で開きます。講師は「恋の五七五ワイド」選者のやすみりえさんで、参加者を募集しています。教室は午前10時半～午後0時半。参加する中高生はやすみさんの指導で句を作り、お互いの作品を鑑賞します。教室に参加しながら、教室の様子を後日、記事にまとめるジュニアリポーター(中学・高校生記者)も併せて募集します。参加無料で、応募の締め切りは2月10日。メール(t-chiiki@shinmai.co.jp)かファクス(026-236-3193)、はがき(〒380-8546 長野市南泉町657)で信毎「ステップ!」係へ。応募多数の場合は抽選となります。参加が決まった中高生のみみなさんには、後日、詳しい資料を郵送します。

2月に佐久で中高生向け川柳教室



やすみりえ

同会館ではこの日、佐久市公民館主催の「第9回佐久市短詩型文学祭」も開かれ、やすみさんは午後2時から記念講演します。聴講無料。